

性格整形

和光高等学校 二年

藤原 ふじわら くらら

「性格整形、今ならお手頃価格です！」そんな言葉がビルのモニター広告からきこえる。二重整形や鼻整形などの「見た目」だけにとどまらず「内面」も整えることが主流になった二五〇〇年の日本。中高生で施術を受けるのが一般的で、どれだけ良い性格を手に入るかによって、カースト上位かが決まる世界だ。高校二年生の私はまだ施術を受けていない。家族にも数少ない友人にも早く受けるべきだと言われるが受ける気はない。誕生日や血液型といっしょに性格レベルを教える風潮の中、私は誰にも教えていない。S、A、B、C、D、Zがある。バイトの面接でも、「君、受けてないからZだね？　うちはC以上じゃないとね〜」。ああ、うっとうしい世の中だ。何が性格整形だ。どこも整ってねーだろ。心の中でつぶやいている。人間は結局レベル分けて、人を下に見たがる。私はそれが大嫌いだ。学校も社会も全部全部自分を安定させる方法が自分より下をみることしかないみたいで。そんな事したくなくて友人に「私さ、性格レベルAなんだよね〜笑」と言われても、ずっと黙っていた。それが原因で陰口を言われていたのも気づいていた。ある日それがエスカレートしてクラス全員から攻撃されるようになった。「お前どうせ無整形のZだろ？」と言われた。いつものことだから流そうとしたら涙がこぼれてきて言いかえすためにそいつらの前まで行ってしまった。「お？　なんだZさーん、殴ってほしいの？　WW」「キモ」「こつち来んなよWW」色んな言葉でざわざわしていた。その中で「Sだよ」と言った途端、そのざわざわが消えて、見たことのない顔で全員が頭を下げてきた。勝った。と思ってしまう。やられていたときより悔しかった。結局私も同類のように見下してしまった。

ことばらんど賞
藤原くらら「性格整形」

審 査 員 講 評 *****

美容整形の広告が増えている昨今、この物語の性格整形というテーマがとても時代性を感じさせ、自然に受け入れられる設定だと思いました。また、性格が良いとされる人物が仲間はづれをする場面や、自らの優越感に悔しさを覚える場面など、「性格の良い・悪いとは何か」を考えさせられる内容で、読後にさまざまな思考を巡らせる作品だと感じました

—— KEN THE 390

ことばらんど賞
藤原くらら「性格整形」